

聖書：マタイ 27：45～51

説教題：どうしてわたしをお見捨てに

日時：2020年9月27日（朝拝）

前回は十字架につけられたイエス様にあらゆる人々があざけりと罵りの言葉を吐いていた様子が記されました。では一方のイエス様は十字架上でどんな言葉を発しておられたのでしょうか。聖書には全部で7つの十字架上におけるイエス様の言葉が記録されています。それらは十字架上のキリストの最後の7つの言葉と呼ばれています。この福音書の著者マタイは、その中の一つだけを記しています。それが46節の「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」訳して「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という言葉です。その前の45節に「さて、十二時から午後三時まで闇が全地をおおった」とあります。本来なら一番明るいはずの正午から午後3時にかけて全地は真っ暗になりました。日食とか砂嵐として説明しようとする人もいますが、それでは説明し切れない明らかに異常な状態です。そして午後3時ごろ、イエス様はこの言葉を発されました。

ある人々はこの言葉に接して戸惑いを覚えます。私もこれまで何人かの方々から質問を受けました。その問いとは次のようなものです。イエス様はこうなることを前もって分かっていたはずではないのか。やがてご自分が十字架上で死ぬことを繰り返し自ら予告して来たはずではなかったか。なのになぜここでこのように叫んでいるのか。これは十字架に上げられた後、イエス様が混乱状態に陥ったということなのか。最後の最後に弱さが現れたということなのか、と。これとセットで考えられるのは、26章36～46節で見たゲッセマネの園におけるイエス様の祈りです。この日の前日夜、敵に逮捕される直前にイエス様はひれ伏して「わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」と祈られました。いよいよ迫って来た逮捕と十字架の死を見据えて悲しみもだえて、「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです」と弟子たちに言われるほどでした。これはイエス様が引き受けようとする身代わりの犠牲がいかに大きいものだったかを示すものです。イエス様はもちろんそのために地上に来られたのですが、だからと言ってそれは簡単なことではなかった。十字架の死とは何であるかを良く見ているイエス様にとって、それは恐れもだえすにはいられないものだったのです。しかしイエス様は祈りによってそれを乗り越えて前進されました。そしてついに十字架上に上げられました。しかしその身代わりがいかに厳しい出来事であったのか。あのイエス様がこのよ

うに大声で叫ばざるを得ないほどのものだったのです。

イエス様はここで何を嘆いておられたのでしょうか。イエス様は肉体的痛みについて叫んでいたのではありませんでした。イエス様が口にされたのは神から見捨てられた事実についてでした。イエス様は神の御子として、永遠の昔から父なる神と一つ交わりに生きて来られました。11章27節：「すべてのことが、わたしの父からわたしに渡されています。父のほかに子を知っている者はなく、子と、子が父を現そうと心に定めた者のほかに、父を知っている者はだれもいません。」ヨハネの福音書10章30節：「わたしと父は一つです。」その今まで一度も破れることのなかった父と子の関係が、たとえわずかな時間であっても本当に断ち切られたのです。その損失を一体誰が測り知ることができるでしょう。ちなみに私たちは誰一人としてこの神に捨てられた状態を味わっていません。神に捨てられた状態とは何の光もない状態です。神から来る一切の良きものがすべて剥ぎ取られた状態です。それこそまさに地獄です。イエス様はこの私たちが本来受けるべきさばきを、私たちに代わって受けておられました。しかもご自身に信頼して救われるすべての人の分です。その総計はどれほどのものだったでしょう。この出来事について他の聖句ではこう言われています。Ⅱコリント5章21節：「神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方であって神の義となるためです。」ガラテヤ書3章13節：「キリストは、ご自分が私たちのためにのろわれた者となることで、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。『木にかけられた者はみな、のろわれている』と書いてあるからです。」

しかし同時にここで注目すべきは、イエス様が「わが神、わが神」とも呼んでいることです。父なる神から見捨てられたイエス様は、ここで「父よ」とは呼んでいません。ですが、「わたしの神」と呼んでいます。ここに神との個人的関係が表明されています。イエス様はなお神に信頼して「わたしの神」と呼びかけ、その神に服従しておられます。前回見ましたように、イエス様は十字架から降りようと思えば降りることができました。それによって今の苦しみを終わりにすることができました。しかしイエス様は十字架に付き続けました。それはこれが神の御心であると知っていたからです。ですからこの場面でもこのように十字架の上にとどまり続けたのは、神への信頼と従順の現れです。ある人は言いました。イエス様が十字架上でこの言葉を発した時ほど神に従順だったことはなかったし、またこの時以上に父なる神を喜ばせたこともなかったと。もちろんこれまでの地上の生涯すべてが父なる神への従順の行為でしたが、そのイエス様の従順はこの

十字架上の姿に、特にこの叫びを発しながらもなおそこにとどまり続けたことのうちにはっきり輝き現れています。その意味で、これほどに父なる神を喜ばせた行為はなかったと言えるのです。もちろん父なる神にとってこれはただ喜びの時だったはずはありません。愛する一人子がこのように叫ぶ姿を見て、何も思わない父がいるのでしょうか。しかし私たちの救いのためにこのことを計画し、御子を遣わしたのは父なる神です。そして御子はその父の計画に従ってみわざを今成し遂げようとしています。この時は父なる神にとってこれ以上あり得ない犠牲を払う悲しみの時であったと同時に、御子がこのように人間を救うためのご自身の計画に従い通した時であって、それは父なる神を深く喜ばせた行為であったと言えるのです。

さて、この言葉を聞いていた人々の反応が 47 節以降にあります。何人かはこれを聞いて「この人はエリヤを呼んでいる」と言いました。「エリ、エリ」ということばを聞いて、「エリヤ」を呼んでいると聞こえたのでしょう。ユダヤ人の中には神の民が困難に陥った時、エリヤが天から助けに来てくれるという信仰があったようです。エリヤは死なないで天に上ったので、神の導きにより、いつでも地上に来ることができると考えられていたようです。するとその内の一人がスポンジに酸いぶどう酒を含ませ、イエス様に飲ませようとしています。これはイエス様への親切心からそうしたのか、あるいはエリヤが来るのを見たいから、それまでは生き延びさせようとした行為なのか、定かではありません。他の人たちは「待て、エリヤが救いに来るか見てみよう」と言います。下手に動かず、エリヤが本当に助けに来るかどうかで、この人が神に良しとされた人かどうか判断しようということだったのでしょうか。

そんな中、50 節に「イエスは再び大声で叫んで霊を渡された」と、その最期の瞬間のことが記されます。イエス様はここで実際には何と叫んだのでしょうか。他の福音書を参照すると、二つの可能性が考えられます。一つはルカの福音書 23 章 46 節：「イエスは大声で叫ばれた。『父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。』こう言って、息を引き取られた。」 注目すべきは、ここでイエス様は「父よ」と呼びかけていることです。父と子の関係の意識が回復されています。その父に「わたしの霊を委ねる」と言っています。ですからイエス様の最後の大声は、嘆きながらの断末魔の叫びのようなものではなく、父なる神への信頼の言葉でした。しかも「大声」とあります。通常、十字架刑に処される人はだんだん力がなくなり、最後には無意識状態になって、いつ死んだか分からないようにして死んで行ったようです。しかしイエス様はここで大声をあげま

した。つまりまだ力があつたのです。その状態でイエス様はご自分から命を渡されました。ヨハネの福音書 10 章 18 節：「だれも、わたしからいのちを取りません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、再び得る権威があります。」

もう一つの箇所はヨハネの福音書 19 章 30 節。そこには、イエス様が「完了した」と言われて、頭を垂れて霊をお渡しになったとあります。「完了した」とはどういうことでしょうか。これは人間の救いのために神がご計画されたわざをイエス様が最後まで成し遂げた！ということです。これで救いは実現する！という勝利の宣言です。イエス様はご自分に定められた道を最後まで進み、飲むべき杯を最後の一滴まで飲み干して、たどり着くべき最後の地点まで行かれたのです。そうしてご自分の全てをささげ尽くして、最後に父なる神にご自身の霊をお委ねされたのです。

さて、その時に起こった不思議な出来事が 3 つ続いて記されています。今日はその中の一つ目までを見ることします。それは 51 節にあるように、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けたことです。これは神殿の一番奥の部屋である至聖所と、その前の聖所とを隔てる幕のことを指していると思われます。ご存知の通り、至聖所は聖なる神の臨在の象徴とされる場所で、大祭司が年に一度、入れるだけの場所でした。これは神の聖さを私たちに教えるものです。罪ある私たちは容易には神に近付けない。聖なる神と罪ある私たちの間にある距離感を示しています。ところがこの幕が真っ二つに裂けました。これは神がなさったことでした。「上から下まで」という表現もそのことを示しているかもしれません。この出来事は何を示すのでしょうか。それはキリストの死によって、今や大胆に神に近づく道が私たちの前に開かれたということでしょう。ヘブル人への手紙 10 章 19～22 節：「こういうわけで、兄弟たち。私たちはイエスの血によって大胆に聖所に入ることができます。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのために、この新しい生ける道を開いてくださいました。また私たちには、神の家を治める、この偉大な祭司がおられるのですから、心に血が振りかけられて、邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われ、全き信仰をもって真心から神に近づこうではありませんか。」旧約のいけにえの制度は、やがてささげられるまことの犠牲イエス・キリストを指し示すものでしたが、今やその完全な犠牲がささげられました。そのことによって神と罪人の交わりを妨げていた罪が完全に解決され、誰でもイエスにあってこのように神に近づけるようになったのです。そのための代価は十分に支払われた。そこで神がそ

の幕を裂いて、ご自分に至る道をオープンの状態にされた。このイエスに信頼する道を通して誰でも大胆に神に近づき、永遠のいのちに入ることができる。そのことを神がはっきり示されたのです。

最後に今日の箇所のまとめとして短く3つのことを述べて終わりたいと思います。一つはイエス様が「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれたので、私たちはもうそのように叫ぶ必要がないということです。私たちの毎日の生活にも色々なことがあります。苦しいこと、つらいこと、泣きたくなること、叫びたいこと、絶望的な思いになることもあります。しかし私たちが主により頼んでいるなら、私たちは神に見捨てられることはありません。なぜなら主が私の代わりにその状態を味わってくださったからです。そのさばきを担ってくださったからです。ですから私たちがその状態になることはありません。どんなにつらいことがあっても、苦しいことがあっても、それは神に見捨てられた状態ではありません。主がそれを引き受けてくださいました。そしてイエス様は私以上の苦しみを経験された方として、私たちのどんな苦しみや痛みも理解し、同情し、下から支えてくださいます。そのことをどんな中でも信じて、イエス様により頼み、導かれて行く者たちであるように！ということです。

二つ目は、私たちはこの主の叫びの言葉に静まって聞き入るべしということです。この叫びは神秘です。私たちにとって、ある意味で永遠のミステリーです。十分に理解し尽くせない言葉です。語り尽くせない言葉です。むしろ私たちにとって最良のことは、語ることをやめて黙ってこの叫びに聞くことではないでしょうか。神の御子がここまでの声を発されました。その御苦しみはいかばかりであったか私たちには計り知れません。しかし静まってこの声に聞く時、私たちの自分たちの罪の深さが分かって来ます。またイエス様がどんなに私たちを愛してくださったか、その愛が少し分かって来ます。私たちのためにここまでしてくださった方がここにおられます。そしてその方は「完了した！」と言われました。このイエス様が備えてくださった救いの道を進む者でありたいと思います。

そして3つ目は、神はこのキリストの十字架を通して、この道を通して来る者は誰でも受け入れることを示しておられるということです。ここに言わば天国の門が開かれています。すべての人が招かれています。私たちはこの招きを感謝して大胆に神に近づく者とされたいと思います。そしてキリストにあつて罪を赦され、永遠のいのちを受け、

神との豊かな生ける交わりと御国に生きる者とされる幸いな歩みへ導かれないと思いません。